

「Tumor Dormancy Therapy

癌治療の新たな戦略」

金沢大学がん研究所助教授 高橋 豊 著

癌研究会附属病院副院長

武 藤 徹一郎

3人に1人が癌で死ぬ時代になった今、癌の克服は国民的課題である。多くの癌は早期に発見されれば手術によって治癒可能であるが、進行癌の約半数はいわゆる根治的手術を行っても再発は不可避であるという現実がある。再発に対する対策の1つは抗癌剤投与であるが、その効果は常に腫瘍縮小を基準にして判定されてきた。“縮小なくして延命なし”が従来の抗癌剤治療の基本的テーゼであったのである。しかし、延命に結びつくほどの縮小がみられる抗癌剤は、特に消化器癌においてはむしろ少ないのが現実である。それならば、抗癌剤の将来には希望はないのだろうか？

本書の主題である dormancy therapy はこの疑問に対する答えを見事に用意してくれている。prolonged NC, time to progression (TTP) など耳新しい言葉が出てくるが、これらはすべて“縮小なくして延命なし”に対するアンチテーゼであり、その概念がわかりやすい図表と実験結果によって解説されている。腫瘍が縮小しなくても (NC)、延命効果が得られれば治療としての効果の評価すべきであるし、増殖までの時間 (TTP) を延長することができれば、腫瘍縮小の有無にかかわ

らず治療効果を評価すべきであるという著者の主張は、誠に的を射たものであり、長年にわたり腫瘍学に携わってきた、優れた臨床家にして初めて言えることである。強力な抗癌剤を服用しても、しょせん完治が望めない以上、dormancy therapy で癌と共存し、QOLを保ちつつできるだけ長く生きるという、患者中心のこの新しい治療法はもっと広く検証されるべきであろう。抗癌剤だけではなく、血管新生阻害剤、アポトーシス誘導剤など、dormancy therapy に利用できる新しい手法が続々と登場してきたお蔭で、この新治療法は更に現実的なものになってきた。

本書は長年 dormancy therapy の研究を続けてきた著者が、その思いの丈を述べた名著である。本書には癌の生物学として癌の転移・浸潤、癌の発育速度、癌化学療法の実況について簡潔に述べられており、この部分だけ読んでも初学者には大変役に立つ。しかし、何と言っても本書の特色であり圧巻は、第4章「なぜ今、tumor dormancy か？」、第5章「Tumor dormancy を得るための治療」の部分である。この2章の中に著者自らの研究成果と知識と信念のすべてが投入されており、簡潔に

して要を得た記述は大変わかりやすい。優れた surgical scientist にして初めて可能な著書であると言える。

癌の完全消滅ではなく、癌との共存という治療法があってもよいと常々考えていた筆者にとっては、著者の主張する dormancy therapy は正にわが意を得たりの感があり、心より拍手を送りたい。しかし、“縮小なくして延命なし”を信奉する人にとっては、この考え方はなかなか受け入れ難いようで、この概念はまだ世の中に広く受け入れられているわけではなく、学会では minority であるが、これも新しい考え方が受けなければならない洗礼の1つであろう。しかし、本書が世に出たことによって dormancy therapy の概念がより広く理解され、臨床の場で利用されるであろうし、それを期待もしている。この意味で本書をすべての oncologist にお勧めしたい。著者の問い“Must we kill cancer?”に“No, we must live with cancer.”と言える人が少しでも増えることを願っている。

● A5 頁192 図82 カラー写真3表33 2000
定価(本体3,800円+税) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)